長寿と健康
わたしの秘訣

中川牧三

イタリアオペラ一筋で1世紀 今も後進の育成に情熱を傾ける

声楽家

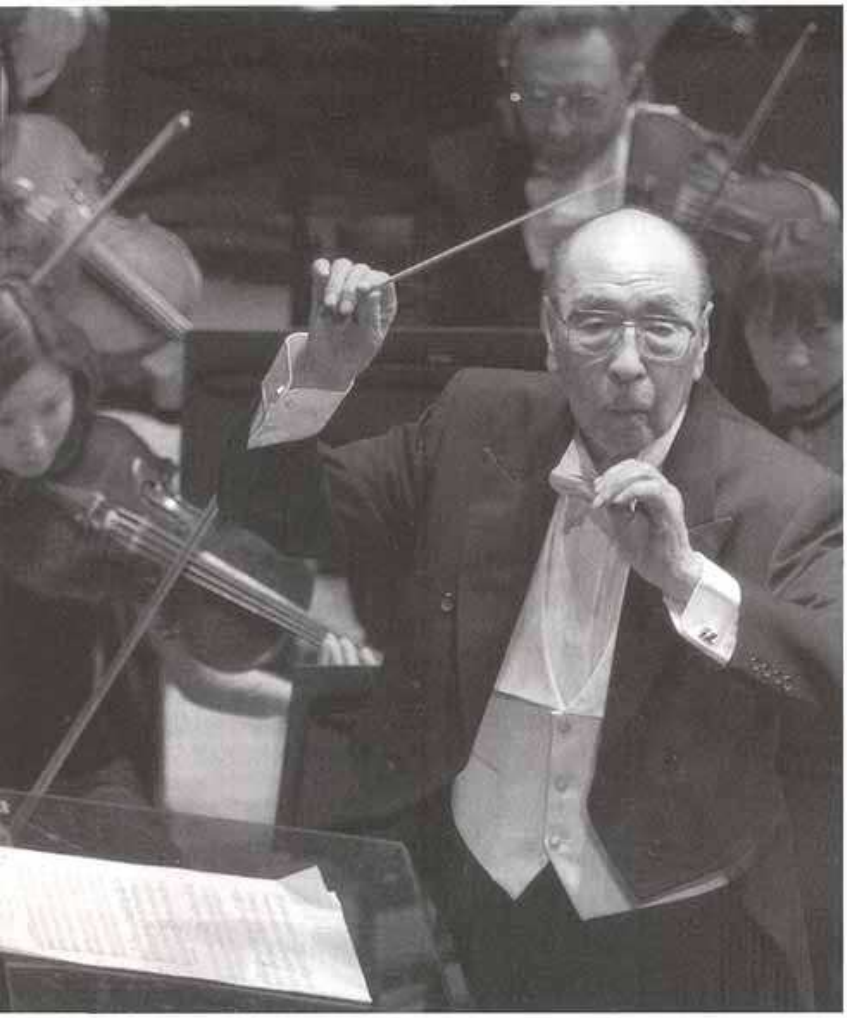
101歳

日本オペラ界の父として、第一線で音楽界を牽引してきた中川牧三氏。つい先日は「生誕一世紀祝賀記念演奏会」を成功させ、後進の指導やコンサートにと、今なお現役で多忙な日々を送る。ベル・カント唱法と出会い、それを日本に広めたいという志と音楽を愛する気持ちが、長きに渡る活動の中、ずっと中川氏を支え続けた。

インタビュー・文 木内昇 写真 渡辺茂樹

なかがわ・まきぞう

1902年生まれ。京都市出身。ベルリン国立音楽大学、ミラノ国立音楽院、南カリフォルニア大学、国立スカラ座歌手養成所などで声楽を学ぶ。国際水準の審査で名高い「イタリア声楽コンコルソ」審査委員長はじめ、数多くの世界的なコンクールで審査員を務める。イタリア政府より「マルタ騎士勲章」をはじめ3つの勲章を受章。



今年2月の関西フィルハーモニー管弦楽団の演奏会に続いて、4月に京都で行われた「中川敬三生誕一世紀祝賀記念演奏会」でもタクトを振った。

――普段から健康に関して気を付けたり、習慣づけていらっしゃることはおありですか？

「特になにもしておりません。あまり運動をしないので、疲れたり肩が凝ったりするとき整体の先生に見ていただく程度ですね。食べ物も、本当に好きなものを食べているだけです。すき焼きやしゃぶしゃぶが好物なのでよくいただきます」

――大病をされたこともないとか。

「今から8年程前、入れ歯を使いはじめた頃、ストレスがあったのでしょう、胃潰瘍になりました。ちょうど知人のイタリア人の歌手が体を悪くして、ひどく心配したことも原因だったのかもしれません。それと風邪から肺炎を併発したことがあるくらいですね。

政治家であった私の父親が、日本で初めてできた畜産振興会の会長をお引き受けした関係で、家の土地の一画に牧場をつくり、まずは実践するという環境で育ちました。そのため子供の頃から当時はまだ珍しかった牛乳を飲んでいましたし、赤ちゃんのときは牛乳風呂に入っていたんですよ（笑）。今思えばそのおかげで体が丈夫なのかもしれませんね。大学を休学して兵役も務めましたし、太平洋戦争では軍の命令で上海へ赴任しましたが、怪我とも病気とも無縁でした」

戦時下の上海では、交響楽団の演奏会を復活させました

――戦時中、上海にいらしたときはご苦労も多かったのでは？

「敵味方が入り乱れて情報収集をしている不思議な都市でした。私はここで中支派遣総軍参謀部付幕僚として働きました。日独伊三国同盟を結んでいましたから、英語やドイツ語、イタリア語を使える私にこの役職が与えられたのでしょう。上海陸軍報道部のスポークスマンも私一人で担当していましたから、情報収集に飛び回って寝る間がないほど忙しかった。

この戦争は『勝てばいい』というだけしかなく、軍部は『明日のために』とか『将来どうしたいのか』ということをまるで考えていませんでした。その上野蛮な行いをする。だから中国の人たちはみな、日本の軍服を見ただけで『東洋鬼（トンヤンキー）』と言って逃げるんです。『これではいかん、こんな戦争は百年続けても終わらない！』と思って、私は軍が現地の人々に禁止していたことをみな許しました。私の上にいた参謀副長が心の広い人で、『全部こちらがカバーするから、好きにやっていい』と言ってくれました。ルーズベルトが亡くなったときも、たとえ敵国であろうと弔意を示すのが騎士道精神だと言って、弔旗を掲げさせました。他の軍人たちは敵国のために弔旗を揚げるなんて絶対反対でしたし、憲兵隊の司令官からは直ちに降ろすよう迫られましたが、頑として譲りませんで

未だに音楽を聴くと、涙が出んばかりに感激。様々な状態がよくなる

（左）イタリア・オペラを代表する歌い手、レナータ・テバルディさんと一緒に。他にもマリオ・デル・モナコ氏など中川氏の人脈は広い。

した。国際法でも弔旗を揚げるのは当たり前ですから」

――上海ではオーケストラの演奏会を復活させたということですが。

「当時世界最高水準を誇るといわれた上海交響楽団の演奏会を復活させました。どんな状況であっても、いいオーケストラが奏でる最上の音楽を聴ければ素晴らしいでしょう。私が赴任するまでは、ほとんど外国人ばかりのお客を全員起立させて、『君が代』を演奏したりしていましたが、そんなものは一切演奏しちゃいけない、オーケストラは上海に駐留している外国人を喜ばせるためにやるのだから、とすぐにやめさせました」

――お若いときから音楽にいそしまれてきたから、軍部の常識に縛られず柔軟な考え方をなされたのかもしれないですね。

「いそしんだ、というレベルではない、音楽が無茶苦茶好きだったんです。音楽以外にやりたいことなどないくらいに。子供の頃音楽に触れてからずっと夢中です。はじめはバイオリンに熱中していて、本格的にこの道に進みたいと考えるようになりました。家族ぐるみで親交のあった近衛秀麿先生に相談すると『だったらヨーロッパに行って本場の音楽を学ぶのがいい』と。それで近衛先生に後見人として同行していただきベルリンに行きました。

ところが実際ベルリンで音楽を学ぶ中で、声楽に大変興味が湧いたのです。歌も子供の頃から習っておりましたから。昔、芦屋にモンテカルロ王立歌劇場の歌姫だった白系ロシアの亡命貴族、オルガ・カラスロワ先生がいらっしゃって、歌の手ほどきを受けていました。最初から、最上のレッスンを受ける好機に恵まれました。それに比べて、ベルリンで受けた声楽のレッスンは、どこか違和感があったんです。そんなときに、イタリアから来たテノール歌手の演奏を聴いて、あまりの素晴らしさに感激しましてね。声楽はイタリアで学ばねばダメだと悟って、それからすぐに近衛先生と一緒にミラノへ渡りました。これが本場イタリアのベル・カント唱法との出会いです」

――ドイツの声楽とベル・カントの違いというのは？

「ドイツの声楽は、師匠の真似をする形で技術を習得します。日本の浄瑠璃なども同じですね。けれどベル・カントはイミテーションではできません。自分の声をどう鳴らすか、というところからはじめて、その人の自然の声を引き出し、独自の唱法を見出していきます。ですから喉を痛めず、美しい発声ができるのです。

私はベル・カントを日本にも広めようと、戦後、帰国してから関西で最初の本格的なオペラを近畿各地で次々と上演しました。その後、ミラノ留学時代の同門の親友である名テノール、アレクサンドロ・ジュリアーニから、彼の創設した名門『ヴェルディ国際声楽コンクール』の審査員と運営委員を頼まれました。これはヴェルディ声のためのコンクール、いわばベル・カント唱法をマスターしていなければ無理といわれているレベルの高いコンクールです。『この仕事はベル・カントの神様といわれたA・チェッキに習った君の使命だ』と言われて、この審査員は30年務めました。新たな才能を見出すために他にも多くの審査員を歴任してきました。けれども、最近は審査員の質も落ちてきている。やはり声だけは本当の声を出した歌手でないと、審査できないんですよ。それなのにマネージャ

ーや批評家が、呆れるほどひどい審査をするのは残念ですね」

――日本でもベル・カントは次第に根付いてきていますよね。

「努力の甲斐あって次第にベル・カントの重要性は広まっています。それに世界水準のコンクールに出るのならベル・カントを学ばないと無理ですからね。イタリアから来た歌手の演奏を聴いて、今まで聴いてきた歌とあまりにも違うので目覚めた人も多い。ただ、学校自体はまだまだ意識が変わらないですね。日本の先生方というのはドイツに留学される方が多いですから。なので、まだまだベル・カントが根付いたとはいえません。

音楽の起源はイタリアではなくドイツだと勘違いしている人も多いのが現状です。私もイタリアのボローニャに家がありますが、バロック時代はハイドンもモーツァルトもベートーベンも音楽家はすべて、ボローニャに留学しないとヨーロッパでは一流の音楽家として認められなかったんですよ。音符や五線ができたのも全部イタリアで、ドレミファソラシドがイタリア語だということを、日本人は知らない。そういう悲しい教育を受けている。

またオペラ自体も勘違いをされています。その曲を演奏しただけでオペラというわけにはいきません。舞台の衣装から装置まで何から何まで、全部がひとつになってオペラといいます。また、ギリシャ悲劇が根底でないといけない、ということも忘れてはならない。テーマがそこにないものはオペラではないんです。

何にせよ、基本はひとつしかない。正しいテクニックもひとつです。でも一番簡単なことを伝えるのは、一番難しいですね」

――基本を周りの人に伝えていく上で相当のご苦労があるのでは？

「周りの反発ばかり受けていました。真実でないことがまかり通ってばかりで、腹立たしいこともありました。私は反逆をしようと思っているわけじゃない。真実を伝えるという、普通のことをしているだけなのですが。日本の文部科学省も音楽に関してはなかなか教育方針を変えないですからね。今の音楽界には素材のいい人が多くいます。その人たちがどう育つのか、というのは、指導者や環境に大きく左右される。できればその環境を整え、若い才能を応援したいですね」

――例えば今まで、音楽をやめてしまいたいと思ったことは？

「それは一度もなかったです。どんなに鬱陶しいときでも、音楽を聴けばすぐ直ります。以前肺炎で入院していたとき病室でCDを流したら、意識がまだはっきりしないのにシャンソンを歌いはじめたらしいんです。すると一気に快方に向かったそうです。未だに良い音楽を聴くと、涙が出んばかりに感激してしまうんです。様々な状態がよくなる。心から音楽が好きなんですね」

――そうして好きなことをやり続けることができる、自分の信念を保ち続けることができる、というのが元気の源なのでしょうか？

「今も声楽のレッスンをしたり、レコードを聴いているときは、ポジションのことを考えます。そうすると自律神経の刺激にもなっているでしょうし、声を出せば横隔膜を動かして深い呼吸をしますから、体にもいいのでしょう。正しい発声を追求し続けることは健康にも効果があるのかもしれません。

それに『まだまだやらなければならないことがある』という意識が活力の元になっているのではないかと思います。今、一番大事なことは、わが国の声楽が正統な道を歩んでくれること。今はまだ残念ながら逸れたところを歩いています。私は、若い人達に真実のもの、本当のことを究めてほしいので、その方向性を示すために尽力するだけです。自分がやらなければならないことは、なんとかしてやり遂げたいと願っています」

身長は180cm、スラリとしたスタイルと、上質なジャケットを粋に着こなす様子は思わず100歳を越えているお年を忘れてしまうほど。